

6. 高安三夫、澤賢藏、1931a. 屈斜路湖調査復命書.
7. 田中阿聚磨、1927. 大沼池の不思議な水、自然科學, 2, 181—189.
8. Thienemann, A. 1926. Die Binnengewässer Mitteleuropas. Die Binnengewässer. Bd. 1. Stuttgart.
9. Thienemann, A. 1931. Der Produktionsbegriff in der Biologie. Archiv f. Hydrobiol., 22, 616—622.
10. Thienemann, A. 1931a. Tropische Seen und Seetyphenlehre. Arch. f. Hydrobiol., Suppl. 9, 2, Tropische Binnengewässer, 205—231.
11. Yoshimura, S. 1931. Contribution to the knowledge of hydrogen ion concentration of the Lake water in Japan. Proc. Imp. Acad., 7, 5, 195—197.
12. 吉村信吉、1931a. 日本の湖水の水素イオン濃度、地理學評論, 7, 10, 848—876; 11, 943—969.
13. 吉村信吉、1931b. 日本湖水の窒素化合物と磷酸鹽、水産物理談話會會報, No. 29, 431—438.
14. 吉村信吉、1931c. 湖沼標式問題の現在までの進歩と日本の地方湖沼學、科學, 1, 8, 327—332.
15. 小久保清治、1931. 酸性湖の魚と「フランクトン」、帝水, 10, 12, 10—15.
16. 小久保, 田村, 阿部, 1931. 忍山湖の生物學的研究概報、齋藤報恩會時報, 59.

嘉南大圳について

川 上 健 三

一、嘉南大圳の意義

嘉南大圳といふ言葉の意味は、嘉義・臺南兩廳下に亘る大なる埤圳といふ事であります。元來亞熱帶、熱帶に屬する臺灣では、稻、甘蔗の栽培上、灌溉排水施設の特に有効な事は、布哇の

甘蔗が灌溉に依り五割增收した有名な實例より見てもいふ迄もありませんので、二百年の昔より此の施設は比較的發達し、規模の大小、設備の如何はさて置き、水在る所には必ず其の施設を見たのであります。之等灌溉排水施設を稱し

て埤圳といふて居ります。即ち尙ほ詳しくいふならば康熙五十六年に出されました臺灣に於ける地誌であるところの諸羅縣誌の規制志水利の項に

凡築堤潑水灌田謂之陂。或決山泉或導溪流。遠者數十里。近亦數里。不用築堤。疎鑿溪流。引以灌田謂之圳。遠者七八里。近亦三四里。云々

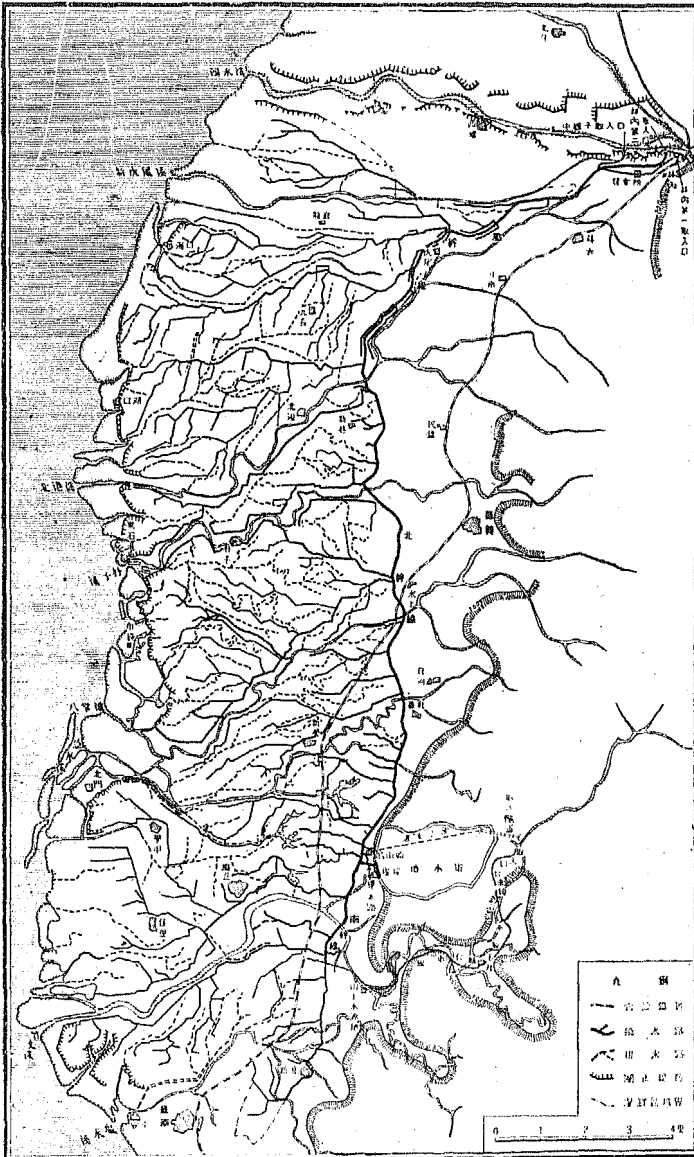
とあります。堤を築いて水を貯へて灌漑する方を陂と稱し、直接川から溝渠に水を導いて灌田する方を圳といふたのであります。之が現在の如く埤圳といふ風にはれる様になりましたのは何時頃かと申しますと諸羅縣志より百十五年程後の、道光十二年に起稿されました矢張臺灣の地誌の一つであります噶瑪蘭廳誌の規制志には

臺地凡水所都處。不論圓池方沼。概名之曰埤。埤即陂之音訛也。

とありまして埤といふ文字を使用し、それは

陂の音訛であると言明してあります。又之より後に出ました淡水廳志にも陂を説明して居る處でわざわざ「一作埤」と斷つてあります。その他今迄は陂とあるべき處が埤の字をもつてあてられて居る處が多くあります。之等より見ますれば此の頃からの等水利施設が段々と専ら埤圳といふ文字であらはされる様になつたのではあるまいかと思はれます。而して之等の水利施設は前にも述べました様に、比較的古くから發達して居りました。蘭人時代以前にも鄭芝龍が銀牛を給して開拓を奨励したとの記録はありますが、大體は此地は唯海賊等の根據地となつて居りましたので、彼等は沿岸を荒す事のみを心として特別に農業施設等をしたわけではなく、蕃人の跳梁するに任せて居たのではなからうと思ひます。先づ水利施設に心を用ひましたのは十七世紀初頭南部に占居して居りました蘭人の時代や、その次に當地を支配しました鄭成功三代の時代からであります。臺灣の諸縣誌のうち

第一圖 嘉南大圳平面圖



にもその遺跡について記載せられて居ります、しかし埤圳の著るしく進歩致したのは清領

以後の事で、彰化縣下の八堡圳、鳳山縣下の曹公圳等は、その代表的のものであります。前者は

康熙中葉に着手され、一萬九千餘甲に亘り、後者は道光年間になされ、舊圳二千七十八甲、新圳一千五百甲の田を灌漑するものであります。

さて嘉南大圳も臺南州下の縦貫鐵道以西の、北は濁水溪より、南は臺南市に至る、南北約九〇軒、東西約三〇軒、十郡五街四十庄、四十八大字を含む十五萬甲に亘る大灌漑排水施設でありまして、臺灣に於ける劃世的大事業でありまゝす。一甲と申します面積の單位は大陸にもありませんもので、伊能氏はその著、臺灣文化志に於て

“或は甲はもと和蘭人の量制に於ける一單位 kop (一コップは我國の約五合五勺) に基き此定額の輪租若干を附帶する王田の意により幾何コップの價稱を附したりし者、竟に漢民によりて甲 (厝) の音譯字を宛てらるゝに至りしものに非ざるか。果して然らば所謂甲に對する最初の面積極めて窄少にして爾後漸次に擴大せるものなるべし”

と述べられて居ります。

清領時代の甲はどの位の面積であつたかと申しますと先程の諸羅縣誌賦役志の戸口土田考のところに、

内地田論畝凡折算。二百四十弓爲一畝。以六尺爲一弓。臺灣之甲論戈。凡東西南北各二十五戈爲一甲。每戈一丈二尺五寸。計田園一甲約内地十一畝三分一釐零。

とあります。雍正九年には端數を切捨て、十畝を以て一甲と爲し、内地の畝を用ふる事をすゝめた様であります。仲々實行せられず、其後この單位は非常に亂れまして、同じ一甲といふても土地によつてその廣狹を異にして大體我國の一町一畝より一町五段三畝の間を往來して居たそうであります。現在も尙ほ臺灣では甲の單位が用ひられて居りますが、現在の一甲は我國のほゞ一町步で二九三四坪（九反七畝二四步）に相當します。それ故今回完成致しました嘉南大圳はほゞ十五萬町步と稱する事が出來ませう。臺灣の耕地全面積は大體八十三萬甲と稱

せられて居ります。その五分ノ一弱が嘉南大圳の耕地區域に當るわけであります。如何に嘉南大圳の廣大なものであるか、御解りの事と思ひます。

二、大圳附近の地勢

次に當大圳附近の地勢を見ますに、西海岸一帯の地方は、新しい沖積平野でありまして、急峻な三千米以上を二十數峰も數へる脊梁山脈中に源を發した西部の大小河川は、多くはその上流ではその走向に近い方向を示しますが、中流に於て急に西に轉じて、地層の走向を横ざり急に低平な平野に出ます。それ故上流、中流は瀧、急湍が多く、下流に至つても尙ほ急流を爲して一度雨が降れば須臾にして氾濫し、多量の土砂を運び、大水亦容易に一過して廣汎な地積を荒蕪の野と化します。そして複雑な網目狀の水路をつくり、河口には大きな三角洲を形づります。

嘉南大圳區域はこの西岸沖積平野の最も大な

る部分を占めて居るもので、粘板岩及び頁岩より構成せられて居る脊梁山脈に源を發した濁水溪や曾文溪等によりもたらされた沖積土より成つて居ります。此の附近の氣候は、冬期（十月—翌年四月）北部の次高山脈以北の地が北東季節風の影響を受けて、陰濕多雨、あたかも内地の梅雨の如き狀態でありますのに反して、臺中盆地以南の海岸地は、乾燥快晴で、月餘に亘る旱魃が續き、土地は半砂漠狀態となる事も珍らしくはありません。之に反して夏期（五月—九月）には、中南部の此の地方は南又は南東の季節風が卓越しまして、阿里山山脈以南の地は熱帶性の猛烈な雷雨が屢々起り、今度は急激に多量の雨をもたらし、降雨期だけで一年總降水量の約八割を占める程であります。阿里山では一日に一〇三四耗の降水量があつた記録があります。

かゝる狀態でありますので、當地域内の諸溪流は豪雨に遭つては忽ち泛濫し、乾燥の候となつては直ちに涸渴する狀態でありまして、適當

な水源なく、各地で小規模の施設に依り灌漑に利用する様な事は甚だ困難な事でありました。

殊に濁水溪は臺灣第一の大河でありまして、流路の變遷も昔より甚だしく、一旦平野に出ますと、或は分れ、或は合し、縱横參差として廣闊な積地を形成します。そして平時には溪水礫下に滲入して殆んど流滴を絶つ有様ですが、一度降雨至れば忽ち合して一の巨流となり漲溢をほしいままにして、其の河床の氾濫區域は五十餘方里に達し、しかも此の川は其の源を粘板岩層に發します故、風化霏爛した粘板岩が溪流に洗はれ、急湍に碎かれ、更に粉塵して水中に浮ぶので、水色常に濁濁してその名を得て居る状態であります。

(1) 諸羅誌賦役志の戸口土田考にもその大雨の害を述べ、

縣多山溪。夏秋露雨。溪流驟漲。田園沿溪逼港者。悉入蛟宮矣。陂圳之疏築。大者數千金。小亦不數百。突遇洪流。蕩歸烏有。即陂去田亦荒矣。近海者或潮漲兩淹。此皆無歲不

有。嗟此民瘼其能一一上聞乎。とあります。

以上の如く、當地域内は全島中最も水利の便の悪い地方と目され、その上に又この附近は、低濕な新らしい海岸平野でありますので、所によつては農作物の生育に甚だ有害な鹽分を多量に含有して居る處もあり、排水施設も殆んど不充分で、洪水時には一面の荒地と化し、由來自然放任せられて居たのであります。

たゞ僅かに頁岩地から發する曾文溪附近や、其他の粘土質の地に所謂看天田が存し、天興の雨露によつて辛うじて一年一回の水稻作を營みその他畠には専ら甘蔗と甘藷その他の雜作が若干行はれて居たのに過ぎませんでした。

しかも之等は常に旱魃や排水不良等の爲に苦しみつゝあつたのであります。然しながら此の地は熱帶と亞熱帶の二圈内に跨り、その特色である光と熱との恩恵は北部に比して遙かに優れて居ります。又雨量からいふても北部は冬期多雨の爲第二期米作の收穫乾燥困難な事が多く、

宜蘭地方の排水不良な處では、屢々晚稻の栽培を不能ならしめる事がありますが此の地はそれがなく、夏季には之に反して中、南部地方には短時に多大の降雨を見る事がありますが、之は寧ろ甘蔗の生育を旺盛ならしめるものであります。その上土地も廣く、適當な水利施設さへ設けられたならば、本島に於ける一大資源地となり得べき土地であります。此處に計畫せられたのが嘉南大圳の工事施設であります。

三、工事の概要

さて嘉南大圳工事は大正九年九月より着手され、昭和五年三月、本圳主要構造物の一たる官田溪貯水池送水口工事の竣工を掉尾として、十年の歳月を閲し、五千數百萬圓の巨財を投じて遂に完成しました。今この施設の概要を見るに先づ灌漑の爲の水源としては曾文溪及び濁水溪に之を求めました。曾文溪は此の源を阿里山に發し、數千尺の高山に依り圍繞せられ、喬木は多く、良好な水源をなして居ります。又その利

用としては臺南水道が十個内外の水を、又灣裡（善化庄）附近の灌漑地に於て甲歩に約四十五個の水を使用して居るに過ぎません。しかも灣裡附近のは本圳の計畫區域である故、將來は唯臺南水道の爲に、十個餘の水量を給すれば足りるわけであります。尙其他には夏期渇水期に小數の竹筏の通航がありますのみで殆んど他を考慮する必要はありません。此の水を引用しましたが、それには同溪の上流である大埔溪の右岸に取入口を設け、烏山嶺に延長三軒餘、最大流量千八百個の大隧道を穿ち、溪水を官田溪の上流地方に導き、一方曾文郡官田庄烏山頭に堰堤を築きまして、曾文溪の小支流官田溪を締切り、自然の溪谷を利用して四面山岳を以て圍繞した一大貯水池となして、官田溪流域の雨水と、先程の隧道に依り導かれた曾文溪の水とを共に貯水し必要に應じて流出給水する方法を執りました。此の貯水池の形狀恰も珊瑚狀を成して居りますので珊瑚潭と命名せられました。満水面積一億一千萬平方尺有効貯水量五十五億立方尺で、之

を締切りました堰堤は、東洋無比の大堰堤で、その構造も未だ類無き工法として夙に識者の注目となつて居たものであります。今一寸之を御紹介したいと思ひます。

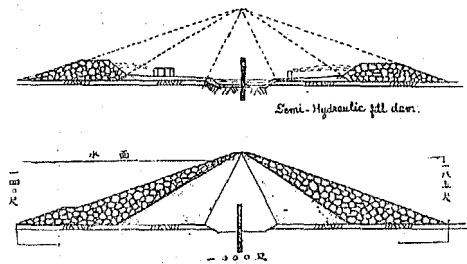
元來堰堤には其築造材料より分けますと大體次の如き種類があります。

- 一、混凝土或は石堰堤。
- 二、石詰堰堤。
- 三、框堰及粗朶堰。
- 四、土堰堤。

當堰堤を設置すべき箇所は第三紀新層の頁岩地でありますので對壓力が非常に弱く、混凝土又は石堰堤の如き重量甚だ大なるものは構造は堅牢で水の滲透する憂はありませんが、沈下の恐れがあり、又地震其他の衝動を受ける時は罅裂を生ずる傾向がありますので、本堰堤としては不適當であります。石詰堰は附近に適當な石材がない上に、之亦前者と同じく堅硬であるので、當地域の如く地震地帯では漏水の恐れがあります。次に木材を組立てた框堰、粗朶を積み上げた粗朶堰は、共に漏水も多く、かゝる大規模の永久的施設には適しません。此處に於てか

第二圖

堰堤築造標準圖(宮田溪時水池)



ますが、そのうちで半水成式(Semi-Hydraulic fill dam)なる形式を用ひました。之東洋に類例なき工法と稱せられる所以のものであります。之は盛土(砂利)を曾文溪より汽車により運搬して、之を外側に置き、内方より強力な水壓ポンプに依り水を注ぎかけ、水壓によつて砂利、砂、粘土と順次に分け、之を固めるのであります。

本堰堤に於ては基礎岩盤を要せず、材料も附近より得られ、本堰堤の如く軟い頁岩地に最適な土堰堤を採用せられたのであります。土堰堤にも種々の工法があり

そしてその中心に混凝土鋼土を打つたのであります。之により内側は中心壁により浸入水を遮断します爲、常に飽和され滑動し易くなりませんが、表面の厚い砂利層の重量でそれを防止し、又風波による障害も防ぐ事が出来すし、又堤の外側は盛土内に浸入した水は、砂及び砂利層を通じて速かに排水され、常に堰堤の安全を期する事が出来るわけであります。

以上の如くにして曾文溪より引水するのであります。即ち之は語義からいへば埤圳の埤に相當するわけあります。之に對して濁水溪の方は圳で同溪の護岸三ヶ所に取入口を設けまして夫々最大取入可能水量二千個、二千個及び二千五百個の溪水を直接其儘田園に引用する方法を執りました。そして之等給水に要する。給水路幹線約二十四里、給水路支線約百十里、分線約八十九里餘を之等區域内に縦横に設けました。排水設備については要所に排水路を掘鑿し在來ありました排水路の改修をも行ひ、總延長百九十里餘の排水路を開築しました。又本圳灌

溉區域の最低地は普通滿潮面以上の地とした故、最大滿潮に對する潮留堤を海岸地方の適所に築造して、そこに開いて居る排水路出口には自動排水門を設けまして、土地の惡水排除を充分ならしめると共に、鹽分の浸潤を防止して新耕地の開拓設備を施行したのであります。

大體以上の如き施設が爲されたのであります。が、その間前に述べた珊瑚潭の土堰堤、本圳最大難工事で石油の噴出、瓦斯爆發等の事故頻々として起り犠牲者五十有餘名までも出すに至つた烏山嶺取入隧道等の大工事の他に、給水路幹線を聯絡する曾文溪外六大水橋や濁水溪よりの給水路幹線と珊瑚潭よりのとを繋ぐ北港溪暗渠や、其他之に附屬する取入水門、分水門、さいぼん等技術者の多大の苦心により美事に完成し着々とその實績を擧げつゝあるのであります。

四、耕作方法

さて之等の施術を如何にして運用しますかについて簡単に申述べたいと思ひます。本埤圳區

域は前にも述べた如く、他に適當の水源がなく本圳を措ては永久に別箇の水利施設を爲すべき望がありません。それ故出來得る限り地域を廣め、水利を均霑たらしめようとしたので遂に十五萬甲といふ袤大な地域となつたのであります。然しそれには水源には限りがあつて七萬五千甲迄は土地に水利を充足させる事は出來ますが、十五萬甲全體に亘つて年二回の水稻作を爲すに充分な水量を得る事は不可能であります。そこで此處に他と著るしくその趣を異にした謂はゆる三年輪作方法を選び、之に依つて此の少い水量を最も有益に使用せんとしたのであります。此の耕作方法こそは嘉南大圳の最も著るしき特色であり、且大圳の生命であつたのであります。即ち全區域十五萬甲を水路系統に依り給水區域を分ち、その標準單位を約百五十甲と定め、更にその區域を五十甲づゝ三區に分つて、毎年循環式に一區劃には夏季單期水稻作。一區劃には甘蔗作。一區劃には雜作を行ひ、三年をもつて一週期廻る方法を執りました。そして雜作時には

給水を止め、水稻と甘蔗に各必要な程度の給水を爲さんとしたのであります。かくすれば大體水稻には六、七、八、九月と給水し、甘蔗作には十一、十二、一、二、三、四月と給水する事となり、その間、水稻と甘蔗の給水時に重複なく最も有効に水量を使用する事が出來ます。

甘蔗は生育期間も長く且つ勞力も多くかゝりますが生育期間や勞力の割合から見ても他の作物よりも有利なものであるが、地力維持の關係上、連作は出來ません。二年一作も無理で、永久に地力を維持し、收穫率を増加するには三年一作が最も合理的なのであります。水稻は甘蔗に次いで雜收入最も多く、生活必需品でもありますから、給水の充分な年には水稻を作るに勝る作物はないが、之は水量の關係より三年一作の外は不可能であります。然しながら水稻耕作期間には確實な收穫がなされ、且つ前作として綠肥栽培の餘裕をもちます故、甲當の收量も向上し、引いては勞力關係及び土地利用上甚だ有利となります。さらに毎年新しいものを作る

といふ事は、毎年毎年同一種類のものを耕作するよりは又新たな興味を農民に起させ、能率も非常に良い事となります。

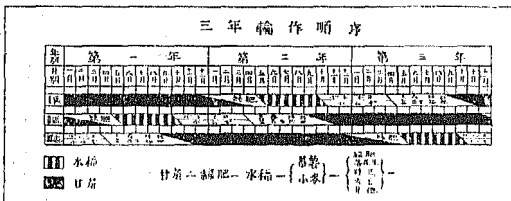
以上の如く、水量利用の上からいふても、作物自身の上からいふても、或は耕作能率上から見ても、かくの如き三年輪作方法は當地域に最も適合した有効な方法と思はれるのであります。

次にその給水状態を見ますに、曾文溪附近は粘土質の地多くあるのに、濁水附近は壤土、砂土多く、後者は滲透量前者に比して遙かに大でありますので、珊瑚潭貯水池の方は原則として大體北港溪以南の地で、ほぼ十萬甲に灌水し、濁水溪を水源とする地方は残りの北港溪以北五萬甲の地に灌漑する事としました。そして新港附近で貯水池線と濁水溪線とを連絡せしめ、平常は直接引水せる濁水溪によつて出来るだけ廣い地域に灌漑し、濁水溪の水量不足の場合には貯水池より之を補ふ事として、兩者の間に機に應じて流用せしめ得る事としました。

さて之等の栽培時期及び給水量は土地の状況

氣候其他の關係により必しも一定しては居ないが大體北港溪以南では稲作は平均六月一日苗代、七月一日植付、九月末迄給水して十月刈取ります。甘蔗は十一月より植付け翌年四月迄給水して、十一月より翌年の四月迄に刈取ります。濁水溪を主要水源とする北方の區域では十月下旬よりは季節風が強烈でありますので五月苗代、六月植付、七月、八月、九月と給水、十月には刈取り甘蔗は十月より一月間を植付とします。此の方法を大體圖示しますれば第三圖の如くです。

第三圖



三年輪作順次

尚ほ三年輪作となれば必しも業主、個人は三區を夫々若干

或は全部所有して居るわけではないので、或年は米作だけ、その翌年は甘藷だけといふ風に、一年に或一種類の作物しか收穫出来ない場合もあり得るわけであります。之に對しては業主權を移轉せしむる事は事實上甚だ困難でありますので、自主的に小組合を組織して作物を相談の上交換する事としました。

五、その効果

大體以上の如き方法をもつて當區域内の耕作がなされる事となりました。そして本圳新設工事後に於ける効果の實地調査を行つた結果は、工事施行以前に比して主要農産物たる米に於て四十六萬餘石、砂糖に於て二億四千餘萬斤の年額増加を來すのみならず、其他の雜作物收穫量に於ても亦大いに見るべきものがあり、従前の農作物年産の倍額に垂んとする大增收となり、加ふるに土地價格の騰貴により九千五百數十萬圓の地價の増加を來すものと豫想せられて居ります、むべなる哉、その今迄の實績を見ても、大

正十三年灌溉を開始した虎尾郡崙背庄の地に於て、昭和二年度にはすでに早くも大有地方の百四十二圓を除いては他の殆んど全ての地方は一甲當百五十圓以上の大増收を見て居ります。他の地方も推して知るべき事と思はれます。

最初、三年輪作の耕法の成功をあやぶんだ農民等もその實績の着々と向上して行くのに驚嘆の眼を見張りつゝも欣然として農務に従事して居るとの事であります。

然しながら臺灣の古來の慣習として、佃戸(小作人)は必ずしも業主(土地所有者)を年々同じくするわけではなく、勿論三年、五年長きは十年以上の長期に亘るものはあるが、概して不拘年限或は現年賸耕と稱せられる一年を過ぐれば何時にても解約出来る佃人多く、それが爲に土地そのものを愛する氣持に缺ける所が甚だ多いのであります。又それが爲、埤圳の如き公共物使用の際にも我田引水のみを事として他を顧みない點もないではありません。その他水量豊富となつた結果、甘藷よりも水稻作をより多く、

爲そうとする傾向も見えない事はないと聞いて居ります。その將來は施設完成せる今日、我々の大いに注目すべき處であらうと思つて居ります。

滿目荒涼としていたづらに溪川の荒るゝに任せ風雨の弄ぶに任せて居た此の地も、今や全局第一の豊庫と化しつゝあります。自然の地理的諸條件を最もよく利用した一例として此處に嘉南大圳の水利施設の一端を御紹介した次第です

(昭和六年十一月十日地理學談話會席上講演)

【註】

(1) 諸羅縣誌 臺灣全誌中に載せらる。康熙五十六年知縣周鑑璋、陳夢林をして編ましめたもの。其の體裁識見、臺灣縣志中の第一位にあると言はれて居る。

當全誌中では最も古いものと云へよう。勿論臺灣府志は康熙三十三年に出來たが當全誌に載せられて居るものは續修本の乾隆二十九年に出されたものであるから。

諸羅とは現在の嘉義の舊名、平埔蕃ロツア族、ツウロオサン社ありし故諸羅山と近音譯字が宛てられて居たが、乾隆五十一年林爽文の亂の時諸羅城中の士民、清兵と力をあはせて之を固守し、全きを得た爲清の高宗純皇帝其

の義を誦し詔して嘉義といふとある。

(2) 臺灣全誌諸羅縣の部 卷之二、規制志水利六六頁。

(3) 噶瑪蘭廳誌 同じく臺灣全誌中に載せらる、陳淑均道光十二年起稿せしもの。

噶瑪蘭とは現在の宜蘭の舊名、もと蛤仔難と書く、清の嘉慶十六年收めて版圖に入れ一廳を新設せし時近音に因み噶瑪蘭と改む。光緒元年廳を改めて縣となすや蘭の字に宜なる佳字をあはせ宜蘭と稱す。

(4) 臺灣全誌 噶瑪蘭廳誌の部 卷之二、上、規制水利の附考一二頁。

(5) 淡水廳誌 同じく臺灣全誌中に載せらる。同治十年、署淡水同知陳培桂、楊凌をして之を纂せしめたもの。

(6) 臺灣全誌 淡水廳誌の部 卷三、建置志水利一五六頁

(7) 埤といふ文字は噶瑪蘭廳誌以前にも用ひられてゐなかつたといふのではない。例へば臺海使槎錄に納められてゐる赤嵌筆談中にも、治埤著洩。灌漑耕耨。頗盡力作。なる文が見えてゐる。又陂といふ文字が噶瑪蘭廳誌以後用ひられなかつたといふのではない。之亦淡水廳誌等にも多く見えてゐる。

只此の時代より多く用ひられはじめたといふのである。現在では全て埤圳と書かれる様である。

(8) 伊能氏著 臺灣文化志 中卷、第十篇第一章六一三頁
(9) 第九篇第一章五三九頁

- | | | | |
|--------------------|--------|-------|------|
| (10) 臺灣全誌 諸羅縣誌の部 | 卷六、賦役志 | 戶口土田考 | 五七頁 |
| (11) " | " | " | 七四〇頁 |
| (12) 嘉南大圳新設事業概要 | 四〇頁 | 七三九頁 | |
| (13) " | 五三頁 | | |
| (14) 嘉南大圳新設事業概要 | | | 一二〇頁 |
| (15) 嘉南大圳組合工事計畫說明書 | | | 一九七頁 |
| (16) 嘉南大圳新設事業概要 | | | 二六三頁 |
| (17) " | | | |

アビシニア國王に謁するの記 (三)

小 牧 實 繁

八月二十五日、日曜日。餘りよく眠られぬ中に六時前早や眼が覺めた。いち早く御寺に行つて見たが少し遲過ぎた。最早や中へは入ることが出来ぬ。七時過宿に歸り、七時半朝食。パンジャム、牛乳、茶、玉子の眼鏡焼等云つたもので平日と變りはない。八時半バシワラッド君、其の友人某氏等と御寺に行つて見る。御勤めは殆んど終つて居て入る事が出来た。バシワラッド君の友人は銃を携へた供を連れて居る。彼は主人が中に入る爲め靴を脱ぐと、ちやんとそれ

を持つて待つて居る。全く草履取りである。アビシニアには今以て封建制度が行はれて居るのである。

御寺の内部には壁畫があるが勿論原始的な異國的东西である。御勤めが濟むと太鼓と鈴の音楽入りで皆んなが踊る。之れは原始的な遺風だと思ふ。此の國は基督教國而も歴史の黎明以來の基督教國であるに拘らず、斯かる遺風、日本の御神樂か何かを思はせる様な原始的な行事を日曜日御寺の勤行に伴つて居るのである。此